

JISS

2014

[特集]

ソチオリンピック に向けた取り組み

[特集]

第10回JISSスポーツ科学会議 ～JISSサイエンスフェア～

女性アスリートサポート —人材育成プログラム—

写真: アフロ

センター長就任にあたって

国立スポーツ科学センター長 川原 貴

岩上安孝前センター長の後を受け、2014年1月1日付で国立スポーツ科学センター（JISS）のセンター長に就任いたしました。最近のスポーツに関する動きとしては、2011年スポーツ基本法制定、2012年スポーツ基本計画策定、2013年には2020年東京オリンピック開催の決定などがありました。現在、スポーツ庁設置に向けた検討が行われており、わが国のスポーツが大きく変わるうとする時期にJISSセンター長に就任し、身の引き締まる思いと同時にやりがいも感じています。

JISSはわが国の国際競技力向上の支援と研究を行うために2001年4月に設置され、すでに13年近くが経過しました。当初、特殊法人日本体育・学校健康センターの一部門として設置されましたが、親組織は独立行政法人日本スポーツ振興センターと組織形態・名称が変わりました。JISSの組織は、スポーツ科学研究部、スポーツ医学研究部、スポーツ情報研究部、運営部の4部体制でしたが、スポーツ情報研究部はその機能を情報・国際部に移管し、JISSは3部体制になりました。また、スポーツ医学研究部はメディカルセンターと名称が変わりました。

設置以前はスポーツ科学とスポーツ現場は一部の競技を除き必ずしも連携が良好とはいえない状況であり、JISSがスポーツ現場の信頼を得られるかが課題でした。地道な努力の甲斐もあり、競技団体からはJISSが国際競技力向上に貢献しているとの評価を得、スポーツ現場の信頼も得つつあるという実感があります。今後は支援と研究のレベルを一層高め、次の段階に進んでいく必要があります。

国際競技力を向上するためには、トップ選手の強化、ジュニア競技者の育成、質の高い指導者の3つが必要で、JISSはこれまで主にトップ選手の強化に対して支援を行ってきましたが、2020年東京オリンピックに向けて日本が飛躍するためには、競技団体におけるジュニア競技者の育成や指導者の質向上の取り組みに対しても支援していく必要があります。いずれにしてもJISSが役割を果たすには競技団体、スポーツ現場との信頼関係がなければなりません。今後とも競技団体、スポーツ現場との信頼関係を大切にしていく所存です。

ソチオリンピックが間近に迫ってきています。冬季競技のトレーニング施設はJISSの近くにはありませんが、冬季競技の選手はシーズンオフのメディカルチェックやリハビリ、体力トレーニング、低酸素施設や風洞施設でのトレーニングなどでJISSを利用していただきますし、合宿や大会時にスタッフが向いて支援を期待しています。ソチオリンピックでの日本選手の活躍を期待しています。



スポーツは育てることができる。



FOR ALL SPORTS OF JAPAN

の収益は、グラウンドの芝生化、地域スポーツ施設の整備、アスリートの育成等に役立てられています。
© 1998-2014 JISS 国立スポーツ科学センター

News Letter
JISS
2014

JAPAN SPORT
COUNCIL

JISS 国立スポーツ科学センター

ニュースレターJISS 2014 vol.26 平成26年1月31日発行
発行 独立行政法人日本スポーツ振興センター国立スポーツ科学センター
編集・発行者 川原 貴
〒115-0056 東京都北区西が丘3-15-1 <http://www.jpnsport.go.jp/jiss/>
編集協力 株式会社体育施設出版、山岸淳デザイン株式会社、元川悦子

ソチオリンピックに向けたサポート

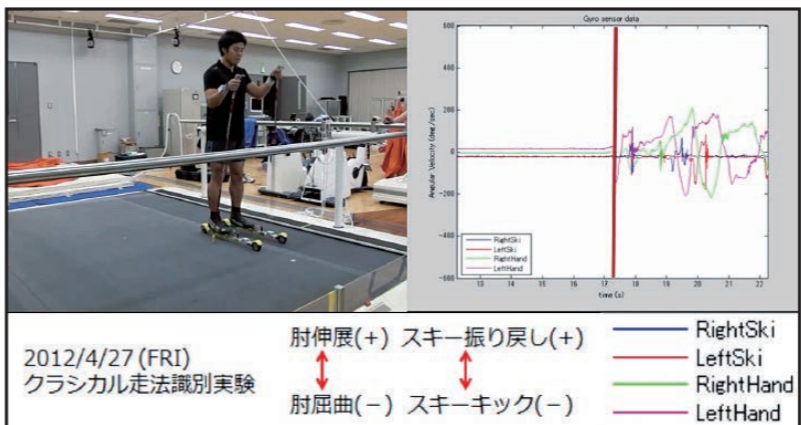
SOCHI2014

科学サポート

データ解析やメディカルチェックを活用し ソチオリンピックでの好成績を!

2014年2月ソチオリンピックがいよいよ開幕する。国立スポーツ科学センター(JISS)でもこの大会の成功に寄与するために、ハード・ソフト面の強みを生かしたサポートを積極的に行ってきた。

雪上競技については、主にジャンプ競技と複合競技で特徴的な試みを実施している。その中心的役割を担っているスポーツ科学研究部副主任研究員の石毛勇介は、サポートの詳細を次のように説



ローラースキーを使った計測・分析

「ジャンプに関しては、2013年からJISSに風洞実験棟ができ、風を調整しながらの姿勢チェックが可能になったのが非常に大きいです。これまでフィンランドまで行って、1日何十万円もの費用を投じてやっていたことを日本で一歩踏み込んだ形でできます。そのアドバンテージは間違いなくあると思います。」

複合では、オリンピック団体で2度の金メダル獲得経験者である河野孝典コーチのアイデアを基に、体力科学実験室にある大型トレッドミルを使ってトレーニングを行っています。「一例を挙げると、ローラースキーを履いてストックにセンサーをつけ、ストックをつく波形がいい時の状態になっているか、左右差があるかどうかを計測・分析するものです。センサーを使った動作解析をすることで、感覚ではなく具体的なデータが出ます。スノーボードのハーフパイプでも似たような試みを実施していますが、確実にパフォーマンス向上につながると思います。」

それ以外の種目はフィットネスチェックがメインで、瞬発力や持久力を筆頭にあらゆる能力を測定している。また、酸素の薄い高地で高いパフォーマンスを出さなければならぬ種目が多いことも特徴で、そうした種目では遠征前に低酸素宿泊室を利用したり、ハイパフォーマンス・ジム内にある低酸素トレーニング室で3〜4日練習した後、現地入りするといった工夫も凝らしている。

「ソチオリンピックの雪上競技はいい結果が出るという自信や手ごたえがあります。JISSやマルチサポート事業があつてよかったと言ってもらえたらうれしいですね」と石毛は期待を込めて話した。



いるのがスピードスケートだ。スポーツ科学研究部研究員の横澤俊治によれば、①競技会での映像分析、②ジュニアチームの低酸素トレーニング、③フィットネスチェック(シニア年1回・ジュニア年3回)というのがJISSサポートの3本柱だとい

横澤は「映像分析では、競技会において、区間平均タイムやスピードの変化、乳酸値の計測などをしています。スピードスケートの場合、カーブとストレートで動きが大きく変わります。どちらが得意不得手かは選手によるので、それを分析して練習にフィードバックする形をここ10年間続けています。2013年度からは選手の滑走軌跡を時々刻々追って、軌跡や速度を細かく分析する手法も取り入れました。」

映像の即時フィードバックは、競技会のみならず代表合宿でも実施しています。スピードスケートにはチームバシユートという3人が隊列を変えながらタイムを競う種目がありますが、滑走軌跡や速度を自動的に算出するシステムを使って、戦術ミーティングの場でデータを選手たちに還元しています。彼らはデータに対して非常に貪欲です。

ソチオリンピック本番では、こうした分析とフィードバックがどこまでできるか不透明な部分もありますが、できるだけ普段に近い環境を提供したいです」と話す。

ショートトラックで重点的に取り組んでいるのがフィットネスチェックだ。シニアは年3回、ジュニアは年2回とスピードスケートよりもシニアの実施回数が多い。

「オフ明けの4〜5月が最初です。陸上トレーニングを積んだ7〜9月に2回目の評価をし、シーズンの真ん中の12〜1月に3回目を実施します。最も重要な国際競技会は2〜3月なので、その時に体力を落とさないようにすることが大きなテーマになります。」

内容はエルゴメーターを使ったテストが中心です。90秒の全力ペダリングでは、最大パワー、前半30秒の平均、90秒平均を割り出せます。競技会でも乳酸値を測定し、90秒ペダリングのデータと比較すると、選手の課題が明確になり、滑りの改善にも役立つと思います」と横澤は話す。



映像の即時フィードバック

アイスホッケーはアスレティック・リハビリテーションの専門スタッフが国内合宿に帯同し、コンディショニングチェックを細かく行っている。ポプスレー・リユージュニスケルトンに関しては、映像分析ツールの提供が軸になっているという。

「こうしたJISSサポートは5〜10年先のスポーツ科学の進化も目指して行われています。ソチオリンピックの結果も大事ですが、我々はそれに一喜一憂することなく、長期的視野に立ったノウハウの伝達、種目間の情報共有を重視して、これからの地道にやっていたいと思います」と横澤が強調するように、JISSサポートはソチ以降も見据えながら進めることが肝要だろう。

マルチサポート・ハウス

雪上競技と氷上競技に対応する 2つのサポートハウスで メダル量産を狙う

2012年ロンドンオリンピックで史上最多の38個のメダルを獲得した日本選手団。その背景にあったのが、マルチサポート・ハウス(以下、ハウス)の存在だ。不慣れた異国で好成績を残すために、日本にいる日常通りの環境を選手たちに提供するのには非常に重要なテーマだ。こうした考えから、今回のソチオリンピックでもハウスが設置されることになった。

ただ、ソチオリンピックの場合、雪上競技と氷上競技の会場が約60km離れているため、ハウスを1カ所に集約するのは不可能だ。そこで、それぞれの近い場所に1カ所ずつ設置する形で準備が進められてきた。

雪上競技の方は、好立地にあるホテルを全館貸切にして、2月3日から23日までオープンする運びとなった。

「雪上競技の会場は①アルペン・スノーボード・フリースタイル、②クロスカントリー・バイアスロン、③ジャンプ・複合、④リユージュ・ホプスレー・スケルトンの4つに分かれています。各会場からのアクセスを重視してここに決めました。ホテルには多くの国からオファーがあつたようですが、親日家のオーナーが日本を最優先に考えてくれました」と石毛は説明する。

一方、氷上競技も同じく地の利を重視し、選手村付近のホテルを確保し、2月1日から23日までオープンする。周辺道路が1本しかないため、渋滞の懸念は少なからずあるものの、選手村から一番近い物件で行き来がしやすいはずだ。マルチサポート事業ディレクターの河合季信は、「スピードスケートの選手たちが2013年3月に同ホテルを使ってトライアルを実施しましたが、非常に好評でした。選手村周辺は何もないので、選手村に缶詰めだと相当ストレスがたまりません。日本語が通じるハウ

スでコンディショニングや食事ができれば、心身両面から有効だと思います」と話す。

二つのハウスに共通するのは、コンディショニングミール・リカバリーボックスという日本食のサポートだ。海外遠征が長期に渡る冬季競技の選手たちは和食を求め傾向が強い。それを提供するということで、本来のパフォーマンスを発揮してもらおうという狙いだ。ロシアの場合、物資輸送が予定通り運ばないケースも多いため、多様なルートから食材を確保する体制を整えている。

リカバリーボックスやメディカルケアの利用、トレーニング、コンセンストレーションスペースを使った精神集中、ミーティングルームでの戦略会議、映像分析やフィードバック、ファミリールームでの家族との面会などもできるようなっている。特に雪上競技の選手村はバスタブがないため、リカバリーバスを多めに設置した。味の素ナショナルトレーニングセンターにあるリカバリープールと同等の機能も用意し、疲労回復を図っていく方針だ。

雪上・氷上競技それぞれ独自のサポートとしては、用具整備が挙げられる。

雪上競技の場合、雪の質に合ったワックスの選び方、スキー板など用具の手入れは勝つために必要不可欠な要素である。競技会場にはワックスマシンがいてケアをする場所もあるが、ハウスではライバル国に秘密を漏らすことなく日本独自のメンテナンスが可能になる。

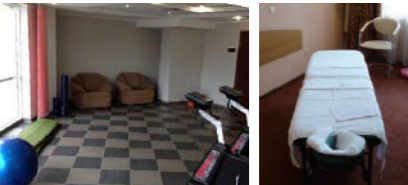
「ソチは日本に近い湿った雪が降るため、日本のワックスメーカーが強みを出しやすい環境といえます。2009年のノルディック世界選手権での



トライアル時のコンディショニングミールホール



トライアル時の用具整備サポートルーム



トライアル時のトレーニングルームとメディカルケア

マルチサポート・ハウスでのサポート内容

カテゴリー	サポート
リカバリー&コンディショニング	コンディショニングミール リカバリーボックス メディカルケア リカバリープール リカバリーバス トレーニングルーム コンセンストレーションスペース
パフォーマンス分析	映像分析/フィードバック
メンテナンス	用具整備サポート メンテナンス機器等保管
情報戦略	日本国内・選手村内との連携 ミーティングルーム
リラックス・リフレッシュ	ファミリースペース ランドリー

※リカバリープール、心理サポートは、雪上競技側ハウスに設置

日本チームの優勝においても、ワックスの力が非常に大きかった。今回、ハウスには技術者を配置すれば、的確なワックス選びやメンテナンスができると思います」と石毛は話す。

氷上競技の方もハウス内の用具整備に力を入れている。

「ソチ周辺にはスケートショップがまったくないので、スケート靴を修理することができません。そういう事情もあつて今回、ハウス内にスピードスケートの整備用具やスタッフを置いて、万全のサポートをします」と河合も強調する。

現地での混乱も想定し、食材や必要器具などの輸送は12月から順次スタートしている。雪上競技で約100人、氷上競技で約150人の選手・スタッフを活用する見込みだ。ここが日本選手団の大拠点になるのは間違いない。

石毛 勇介

(JISSスポーツ科学研究部副主任研究員)

河合 季信

(マルチサポート事業ディレクター)

横澤 俊治

(JISSスポーツ科学研究部研究員)





<トレーニング科学>
優れたアスリートでも、計画通りにトレーニングを行えなかったりコンディションを崩したりすると良い成績は望めなくなる。疲労回復に役立つ行為の一つである睡眠について、ポスターとプレゼンテーションで紹介した。



<ITユニット>
写真は、iPadを用いた映像とセンサーデータの同時表示システム。映像およびセンサを用いた即時フィードバックシステムについて、実際に閲覧や体験していただいた。



<ハイパフォーマンス・ジム>
2013年4月に完成した、トレーニングスペースと科学的測定スペースが一体化したハイパフォーマンス・ジムのツアー形式で紹介し、実際に施設内の機器を体験していただいた。



<スポーツバイオメカニクス>
フォースプレートを設置した場所で、モーションキャプチャーシステムというバイオメカニクスの動作解析の解説とデモンストレーションを実施した。



<風洞実験>
2013年4月に完成した風洞実験棟では、施設の構造や特徴、実験の様子を紹介するとともに、実際に風洞内に入って風速約50km/時の風を受けていただき、空気力を計測する様子を体験していただいた。



<スポーツ心理>
「体験しよう!アスリートの心理検査」と題し、JISSで実際に行われているメンタルチェックを体験していただいた。また、メンタルトレーニング技法の体験や選手への実践について紹介した。



<スポーツ栄養>
新競技者栄養評価システム“mellon”を活用した栄養管理について紹介するとともに、実際にタブレットを使い、昼食のモデル献立の入力、栄養評価の流れを体験していただいた。

第10回 JISSスポーツ科学会議

JISSサイエンスフェア



卓球マシンの体験



ポスターセッション



吉田和人教授
(静岡大学)



スティーブ・ヘイク教授
(シェフィールド・ハラム大学) 岩上安孝センター長

第10回JISSスポーツ科学会議プログラム

開会のあいさつ 岩上安孝 (JISS)

講演 特別講演1「2012年ロンドンオリンピックにおけるスポーツ工学の面からのサポート」
スティーブ・ヘイク (シェフィールド・ハラム大学スポーツ工学研究センター所長)

特別講演2「ロンドンオリンピックに向けた卓球ナショナルチームの科学サポート」
吉田和人 (日本卓球協会スポーツ医・科学委員会副委員長、静岡大学教授)

JISSサイエンスフェア

スポーツバイオメカニクス/トレーニング科学/コンディショニング/測定技術/ITユニット/
アスリートリハビリテーション/女性アスリート支援/風洞実験/スポーツ心理/スポーツ栄養/
ハイパフォーマンス・ジム/トレーニング体育館

閉会のあいさつ 川原 貴 (JISS)



2013 アジアスポーツ科学会議に参加

榊原 覚 (JISS運営部運営調整課)

2013年10月25日から26日にかけて、「2013アジアスポーツ科学会議」が香港の Hong Kong Sports Institute (HKSI) で開催された。同会議はアジアのスポーツ科学研究機関の交流を大きな目的として、2000年から開催されているものである。

同会議は JISS、中国 China Institute of Sport Science (CIS)、韓国 Korea Institute of Sport Science (KISS) が持ち回りでホストを務めながら開催しており、本年は CIS の開催順であったが、HKSI のメインビルディングが完成したこともあり、そのお披露目も兼ねて香港での開催となった。

10月25日の午前中は、新施設のオープニングセレモニーや1時間程度の施設見学が開催された。

HKSI に新しく完成した施設は、宿泊施設やホールを備えたもので、先に整備された研究・トレーニング施設を中心とする建物である。同会議の招待者のほとんどは新施設に宿泊し、各種発表も新施設内のホールですべて行われた。

25日の午後から始まったアジアスポーツ科学会議では、先に述べたアジアの主要3カ国の他、シンガポール、マレーシア、カタール等のアジア諸国に加え、欧州、北米、オセアニアからも講演者を集めて発表が行われた。

JISS からは窪康之先任研究員、中村真理子研究員、伊藤浩志専門職が、JISS における研究・支援の実例を交えた発表を行った。その他の国では、個人の研究テーマに係るものから、当該国のタレント発掘に係るプロジェクト等、幅広い内容で行われた。

2014年はアジア大会開催年のため同会議は開催せず、2015年が韓国での開催。日本での開催は2016年となる。リオデジャネイロ・オリンピックの開催年と重なるため、日本の好成績を題材にしながら発表が行えればと今から期待している。

2013年11月29日(金)、味の素ナショナルトレーニングセンター(NTC)および JISS において「第10回 JISS スポーツ科学会議」が開催された。今回のスポーツ科学会議は「JISSサイエンスフェア」と題し、施設の機能や国際競技力向上に向けて取り組んできた研究・サポートを幅広く紹介することとした。これは、2020年夏季オリンピック・パラリンピックの開催地が東京に決まり、スポーツ医・科学、情報技術面からアスリートを支えている JISS への期待も一層高まることが予想されることから、2020年東京大会開催を視野に、参加者から広く意見をいただけるよう企画したものである。

会議は、岩上安孝センター長が「スポーツ医・科学の新たな進展に、また2020年に向けてスポーツ関係者の熱い思いを束ねていくきっかけになることを願います」とあいさつし、開会した。午前中は特別講演として、2012年ロンドン大会でスポーツ工学面から指揮をとられた英国・シェフィールド・ハラム大学のスティーブ・ヘイクスポーツ工学研究センター所長と、同じくロンドン大会において日本卓球チームの科学サポートを実施した静岡大学の吉田和人教授(日本卓球協会スポーツ医・科学委員会副委員長)の講演が行われた。

まず、特別講演1は「2012年ロンドンオリンピックにおけるスポーツ工学の面からのサポート」と題してスティーブ・ヘイク教授が講演。技術を活用してアスリートのパフォーマンスを高めるというスポーツ工学の役割について解説するとともに、ロンドンオリンピックまでの準備期間中に実施した実際の活動について紹介された。英国チームのサポートに使用された技術的介入の理念と、英国のオリンピックコーチから求められたシステムに対する実際のソリューション

の例について、測定機器の開発や選定からサポートの具体的な内容、その際のコミュニケーションの重要性などを説明された。

続いて特別講演2では「ロンドンオリンピックに向けた卓球ナショナルチームの科学サポート」と題して、吉田和人静岡大学教授が講演。チーム「ニッポン」マルチサポート事業として行われた科学サポートでは大きな成果を得られており、卓球に特化した試合分析ソフトを開発した試合分析サポートについて説明された。また、2006年ころから利用してきた JISS 開発の SMART システムおよび情報セキュリティに実績のある企業のライセンス管理技術を用いて携帯型映像活用システムを構築した映像利用サポートの内容、さらにオリンピック前およびオリンピック会場での具体的なサポート実践について説明された。

午後は JISS サイエンスフェアとして、JISS 施設の機能や研究・サポートの紹介、また一部のサポートを体験できるコーナーの設置など、さまざまなプログラムが提供された。ハイパフォーマンス・ジムや風洞実験棟などの施設の見学および体験といった参加型プログラム、メディカルサポートや女性アスリート支援などの取り組み内容の紹介、研究分野ごとのブース展示など、各担当スタッフの説明とともに参加者との意見交換が図られた。また、ポスターセッションや意見交換会も行われた。

最後に、川原貴 JISS 統括研究部長が「今年は10回目ということで新しい試みをしてみました。2020年東京オリンピックが決まり、スポーツ庁の検討もなされているということで、来年度からさまざまなことが動いていくと思われまします。その中で JISS の役割をしっかりと果たし、東京オリンピックにつなげていきたいと思います」とあいさつし、閉会した。

女性アスリートサポート —人材育成プログラム—

将来的にスポーツ界に貢献する女性アスリート等の育成に有効

2011年のサッカー女子W杯(ドイツ)でなでしこジャパンが優勝し、2012年ロンドンオリンピックでも日本のメダル38個のうち女子が半数近い17個を獲得するなど、女性アスリートの躍進が脚光を浴びている。それに伴い、結婚・出産・育児などでキャリア続行に支障が出た場合のケアや女性スタッフの増加など、彼女たちをサポートする体制の整備も必要になってきた。

JISSでは、JSC/JISSの業務基盤として構築したプログラム実施をとおしてキャリア形成を図り、将来的にスポーツ界へ貢献する女性アスリートを育成する人材育成プログラムを2012年から実施(左図参照)。サッカー女子国際審判員の山岸佐知子さん、アーチェリー元日本代表の松下紗耶未さん、フェンシング元日本代表の荻根澤千鶴さんの3人が目下、カリキュラムの実施に動んでいる。彼女たちに、同プログラムの利点と今後の目標などを語ってもらった。

カリキュラムの実施

- 原則として、JSC/JISSの業務を基盤として構築したカリキュラムを、OJTにより実施
- 個人の将来展望等に応じてカリキュラムを選択 [提供可能なカリキュラム(例)]
 - ・科学分野(測定、研究等アシスタント)・医学分野(クリニック事務)
 - ・情報分野(情報収集、映像サポート等アシスタント)
 - ・運営分野(各種会議等企画・運営)

対象者	対象者	将来展望
●対象者	本プログラムで得た成果をスポーツ界に還元することを望む者で、国際大会での実績を持つアスリート(現役を引退した者も含む)及び審判員。	OJTによりキャリア形成を図り、将来はスポーツ界においてその成果を発揮する。

フォロー体制

- コーディネーターとの初期面談、定期面談などを行い、次の目標設定や必要な支援を実施
コーディネーター：JISS内にプログラムの実施を総合的にサポートする担当者を配置。

人材育成プログラム

環境整備

- 短時間勤務や勤務免除事項の設定など、柔軟な雇用体制を整備



荻根澤 千鶴
(フェンシング元日本代表)

1986年埼玉県生まれ。日本大学大学院卒業。2008年から5大会連続でアジア選手権出場。'10年にはアジア大会、世界選手権にも出場。現在は日本大学非常勤講師、同フェンシング部コーチも兼任。



告をする場を設けてもらっていますが、それはすごくいいですね。コーディネーターはJISSの事情がよく分かっている方なので、各部署・ユニット等のリーダーともスムーズにやり取りができます。潤滑油的な役割を果たしていただけるので、悩みや困ったことを気軽に相談してもらいたいとお願ひしたことがありました。当初は10時〜17時(実働6時間・休憩1時間)という勤務時間帯だったのですが、トレーニングを夕方早い時間帯にやりたいなと感じるようになり、早急で審判は1試合に10km以上走りまわすし、筋力やスプリント能力も維持しなければいけないので、それを考えると、勤務時間を8時半〜15時半に前倒ししてもらった方がいいと考え、コーディネーターの方に相談したところ、スムーズに移行できました。

松下 各部署を回っていると、どうしても戸惑ったり、問題にぶつかったりします。それを週1回話し合って改善につなげられるのはすごく大きいですね。

荻根澤 私は大学の仕事もあるので、コーディネーターの方と相談のうえ、週3日(8時半〜17時15分)と半日(14時〜17時15分)をJISSで勤務させていただいています。現役時代は本場にフェンシングに集中していて、時間的余裕がなかったのですが、JISSで動きやすい環境を作ったことで、自分の時間が増えました。こういう柔軟な働き方ができれば、結婚・出産後も競技を続けられる女性アスリートが増えると思います。環境さえ整えば、続けたい

と考えている人は多いですからね。

プログラム終了後の方向性を考えていらっしゃる場合は教えてください。

荻根澤 私はもともと指導者を目指してここに来たわけですが、さまざまな部署を回って、ようやくJISSの全体を把握しつつある段階です。2年目はドクターの研究を手伝いながら、女性アスリートのメディカル分野を勉強して、女性アスリートをサポートできる知識を身に付けていきたいと考えています。

やはり月経など女性特有のことは男性コーチには話づらい部分がありますよね。自分が引退する時期になって、フェンシング代表チーム(フルレール種目)に女性コーチが入ってきましたが、まだまだ少ないのが実情です。私もその担い手の1人になれればいいと思います。

2013年11月29日に開催されたJISSスポーツ科学会議で、このプログラムについて他競



松下 紗耶未
(アーチェリー元日本代表)

1982年大分県生まれ。近畿大学卒業。2002年にアジア大会出場。'03年には世界選手権団体2位。'04年アテネオリンピックに出場した。



今回人材育成プログラムを実施することになったきっかけを、それぞれお話しいただけますか。

山岸 私は、2012年6月からスタートしました。結婚して3年くらい専業主婦をしながら審判活動をしていましたが、当初から本格的に働きたいという気持ちを強くもっていました。でも、審判活動で頻りに国内外の遠征に行かなくてはならず、トレーニングも積まないといけないのですが、以前の職場は派遣やアルバイトが中心だったので、本格的な審判活動は難しい状況でした。その点このプログラムは柔軟にスケジュールを調整できるので、私にとっては大きなプラスですね。

松下 私は2013年3月まで現役選手だったのですが、引退後は若い選手を指導したいという希望を持っていました。そのためにも資格や勉強が必要だと考えていた時、JISS関係者の方にこのプログラムを紹介していただきました。当時の所属先では最後の1か月程事務仕事をしたくらいで、社会人経験が皆無に等しかったので受け入れてもらえて感謝しています。

荻根澤 私は松下さんより少し早く、2012年12月に現役選手を引退しました。所属先との契約は3月で切れて、4月から母校で非常勤講師をしながらフェンシング部のコーチとして指導することになっていました。現役時代から日本オリンピック委員会(JOC)のキャリアアカデミーでは、セカンドキャリアについての講習会等でお世話になっており、現役選手を引退する際に進路の相談をしていたときに、このプログラムのことを教えていただきました。



山岸 佐知子
(サッカー女子国際審判)

1973年千葉県生まれ。東京女子体育短期大学卒業。サッカー経験・審判員資格取得は短大時代からだが、2003年には女子国際審判となり、'08年以降通第5回、アジア年間最優秀女子審判に選ばれている。



将来、スポーツ界やフェンシングに携わりたいと考えていたので応募を決定し、2013年4月からプログラムをスタートすることになりました。

それぞれのプログラム内容はどのようなものですか。

山岸 私はメディカル分野が中心で、普段はドクターの調査の手伝いをしながら、審判の健康状態の調査を実施しています。2013年秋に学会発表をさせていただき、2014年には論文を出すところまで持っていきたいと考えています。

このような調査や分析に携わりつつ、2013年6月からの1年半でロンドンオリンピックや女子アジアカップ、東アジアカップ、AFC U-19女子選手権などにも参加しました。年間3分の1は外へ出ていますが、そんな条件でもプログラムを継続できるので助かっています。

私の場合はJISSに来る前、ゴムの分析をする会社でアルバイトをしていて、エクセルなどを操作する機会があり、その経験が大いに役立ちました。ただ、普通の女性アスリートは競技専門のケースが多く、社会人としての基礎知識や技能を学ぶチャンスがほとんどだと思います。社会人としてJISSで働けるのは、すごく貴重な機会だと思います。

松下 私と荻根澤さんは1年目なので、JISSの部署・ユニット等(①心理グループ、②測定アシスタント、③情報処理・映像技術ユニット(1Tユニット)、④運営部、⑤栄養グルー

プ、⑥クリニック)を1か月単位で回る形でプログラムを実施しています。

心理グループでは選手のメンタルチェック時のサポート、測定アシスタントでは実際に選手の体力測定を行ったり、選手の案内業務に携わったりしました。1Tユニットに関しては、パソコンの基本操作を学んだうえでJISS独自のソフトの使い方を把握し、各競技団体に対する講習を荻根澤さんと一緒に行いました。高度な内容で覚えることも多かったのですが、1Tユニットでのプログラムは2か月実施しました。

運営部では、館内見学や取材対応、電話対応、郵便の仕分けなど総務的な仕事をこなし、栄養グループではおいしいレシピと7階栄養指導食堂に置いてあるテーブルメモの立案、サプリメントの購入などの補助を行いました。実際に入力している選手が沢山いることがわかり、現役選手時代サプリメントに頼ってなかった私はその多さに驚きました。クリニックはこれからですが、カルテの整理や診療予約などに関わるようになっていきます。

荻根澤 学生時代から競技1本でやってきたので私はアルバイト以外、社会で働いたことがありませんでした。山岸さんのおっしゃるとおり、社会人としての基本を知らない状態でした。今回運営部で電話対応をしたり、取材依頼の整理に携わったりしてみても、裏方の大変さがよく分かりましたね。JISSには約150人のスタッフがいますので、電話1つ取るだけでも大変です。今になって社会人1年目のような経験をさせてもらっていることは非常にありがたいです。

栄養に関して、選手時代に栄養士さんから個別指導を受けてはいましたが、今後専門グループに携わることにより深い知識を得られたらと思います。松下さんと一緒に講習をやった1Tユニットでの業務もすごくいい経験になりました。

週に1度、3人で集まり、コーディネーターを交えたミーティングを実施していると聞きました。その成果はいかがですか。

山岸 毎週水曜日から木曜日の1時間半、現状報告の選手や地方協会関係者の方から質問をいただきます。自分の競技経験を生かしてセカンドキャリアを構築できるシステムなので、興味を持つ人が増えてくれるのはいいことです。

松下 アーチェリーナショナルチームも今は男性の監督とコーチしかいません。女性スタッフが入ってくれば、女子選手の間も少なからず変わってくると思います。今は非常に毎日充実しています。2年目からは専門分野をより深く勉強できます。月経や栄養のことを学んで、女性アスリートのプラスになればいいと思います。将来的には、指導者の道に進みたいと考えています。

選手時代はJISSのスタッフの方とお話しする機会もなかったのですが、ここでプログラムを実施して多くの方と知り合うことができました。人脈という点でも、今後の自分にとって大きなプラスになると思います。

山岸 現在は審判活動とこのプログラムを並行してやっていますが、年齢的にも引退が近いのは事実です。もともと女性の審判指導者は少ないですが、こうしてJISSで学んでいることで、視野の広い女性指導者になれるかなと前向きな気持ちになります。

サッカー協会の審判研修会で一度JISSのドクターに来ていただき婦人科的な講義をしたところ「もっと早くこういう知識を得たかった」という声が多く聞かれました。現状では審判の指導者は男性中心です。女性特有の話はどうしても聞きづらいので、貢献していきたいと考えています。